

2018.10.30.

②-1

DATE

時間と空間の概念について

古事記の冒頭には「天地初発之時」(^{あめつち はい びと}天地の初めて発けたる時)とあるが、これは実際には「その時にはすでに」の意味である。

日本書紀の一書にも「天地未生之時」(^{あめつち いま な}天地の未だ生らざる時)という表現があるので、現代人にはこちらのほうが解りやすいたらうか。

即ち、神話冒頭部の(本来の意味での)高天原とは、多田琉で言う「無宇宙」のことであり、「我々人間にも理解できるようなレベルでの、時間や空間」は、存在していない領域のことである。

「^{いかんそ}時間素や^{くうかんそ}空間素が、まだ時間や空間として組み上がっていない領域」とでも呼べば良いだろうか。あるいは逆に「永遠の時間と無限の空間があり、どうしてもまだ全く限定されていない領域」と表現すべきだろうか。

いづれにせよ、我々人間の認識能力では
「一定の形に組み上げられた(限定された)時間と空間」
しか理解することができない。

そのため、無宇宙とは基本的に、我々人間の理解を
超えた領域であり、その領域の話として言う「時間(経)
や空間(緯)」とは、もののたとえであり、

少なくとも我々が日常的に理解している「時間や空間」
とは全くの別物なのである。

未来324頁より

(緯又 — 神界^{カミヨ} (空間) } 神代
経行 — 神代^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字

大切なのは、「カミヨ」というコトヲマ。 (無宇宙)

「^{カミヨ}神代^{カミ}の神」は、「無宇宙の^{ヒノカミ}零の神」の意味。

傳へて云ふ。悉達多太子は、城門を出でて、生老病死の苦惱を目睹し、死生解脫の志を起させ給へりと。常無常。變轉出沒。生、果して生か。死、果して死か。

「生死遷流」の四字は、熟字のやうであるが、生死は、即、遷流なので、同じことを繰返したのである。で、其の一つが判明^{ワカ}れば、生の一字でも足り、死の一字でも澤山なので、また、遷の一字にも、流の一字にも、盡きて居るのである。それ故に、四字の中の、どの一字でも、それだけで、事は足りるのである。けれども、可哀^{アハレ}や。人間身には、それが判明^{ワカ}らない。で、だんだんと蛇足を加へて行く。蛇足だから、益々邪魔が殖えて、愈々分らなくなる。それでも、何か色色と聞きたがる。話したがる。一字で充分なのに、二字にする、三字に殖やす、遂に、四字にして、「生死遷流」と並べたのである。それを、又更に、衍べ廣げて、悟證の方便かと思ふのである。が、果して、便宜を得るか何うか。

「生死遷流」。生きて居るものが死に、死に往くものが、また生れ来る。か、どうかは分らずとも、世には、生が有り、死が有り、死が有り、生が有る。遷り變り、更り代りつつ、流れ流れて、止まるところを知らぬ有様である。それが、見る通りの状態である。此の變化は、どう云ふ内容であるのか。生れ生れて、孰^{イシレ}より来るのか。死に死にて、何れに往くのか。流れ流れて、何處に流れ着くのであるか。遷り變りて、止まるところは無いのか。噫。此の人身、果して孰れより來り、何れに往くのか。

『人身孰れより來る。之れを問へども答へず。』

來るものが、生なのか。去るものが、死なのか。死と呼び、生と名づくるが、其の、生と死とは、果して何れだけの異別が有るのであらうか。

『死者何處にか往く。之れを聞けども知らず。』

人は皆、生れて來た。過去の人は、皆等しく死し去つたのである。現在の我等も、亦必、死ぬであらう。斯の如く、生と死とは、人間身は固より、一切の生物が、經過しつつある事實である。自己の經過しつつある事なのに、どうして、それが明瞭せぬのであらうか。自己のことを自己が知らぬのであるとすれば、何れに向つて尋ねようか。仰いて眺むれば、天は蒼蒼として語らず。伏して聞けば、地は黃黃として黙つて居る。

『蒼蒼たるは天か。黃黃たるは地か。』

生を知らず。死を知らず。天を知らず。地を知らず。我と思ふところの此の肉體身も、此の靈念思考も、果して我であらうか。懷疑は懷疑を孕みて、呆然、前後を辨ぜざるに到るのである。

『古人之れを號^{ナツ}けて宇宙となす。』

此の天地。此の人身。此の生。此の死。此の出沒變轉。我は、我が來るところを知らず、我が往くところを辨ぜぬ。が、古人は、之を宇宙だと教へて居る。

『宇宙とは經緯なり。』

「宇宙」の字を、日本紀などには、^{アメノシタ}天下と訓み、現今の人は、存在する限りだとか、天文學者の認め得たる限りだとか云つて居る。けれども、本來、此の字は、^{タテスキ}經緯の義なので、^{タテ}宇は經で、^{スキ}宙は緯である。經が有り、緯が有ると云ふのは、^{アリテアルモノ}存在であるとの義で、^{ナクテアルモノ}實在の結び結ばれて、それが、人天萬類なりと、人天萬類各自に認識したる實體であるとの意である。それは、幾何學に云ふところの「點」ではないので、「線」でもないの、^面「面」でもないの、^點「點」の結び結びたる「線」と、「線」の結び結びたる「面」と、「點」と「線」と「面」と

の結び結びたるころの、「球」なのである。此の「球」であつて、はじめて、^{タテ}經と^{ヌキ}緯とを完備したと云ひ得るのである。之を、宇宙を構成し得たと云ふので、「^{アノミオヤアノミヅルヒノアマノサギリクニヅルヒノクニノサギリノミコト}天祖天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊」と稱へまつりて、日本民族傳承するところの「^{カミ}神」にてましますのである。「かみ」の「か」は^{タテ}經を示し、「み」は^{ヌキ}緯を指して居る。其の故は、「か」の音義が、晃耀赫灼で、天を表し、「み」とは、充滿實塞で、地を示すので、天と地とは、乾と坤とも云ひ、陽と陰とも、男と女とも、雄と雌とも、凸と凹とも、^{イチ}一と^ニ二とも傳へられて、父^{チチ}と母^{ハハ}との義である。それ故に、日本の古典には、「^{フタハシラミオヤノカミ}二柱御祖神」と稱へまつり、「^{イザナギイザナミフタハシラノカミ}伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」と記されてある。經^{タテ}なるは父^{チチ}、緯^{ヌキ}なるは母^{ハハ}と稱へて、宇と宙とである。此の宇とは、宙を待ちて初めて宇であり、宙もまた、宇を待ちて初めて宙である。經^{タテ}が有つて初めて緯^{ヌキ}であり、緯^{ヌキ}が有つて初めて經^{タテ}であり、乃至、父^{チチ}が有つて初めて母^{ハハ}であり、母^{ハハ}が有つて初めて父^{チチ}であるのと同様である。其のやうにして初めて^{タテ}經體が成り立つ。

『^{タテヌキ}經緯の存在は^{アル}簡體なれば。萬類萬物は各自に宇宙を構成しつつ宇宙の内に在るなり。』

その簡體は、重重又重重に、重なり重なつて、人と成り物と成り、我であり、彼であると、人皆は認むるに到るのである。それで、六尺の人間身裡にも、重重又重重の簡體が住んで居る。人天萬類は、地球星裡に住み、群星は、太陽系中に住み、又更に、群太陽系は、大宇大宙と、相互に出入往還しつつ、重重無盡の圓光球裡に、重重無盡の生死起滅を重ねて居る。人天萬類は、相互に、自己の世界として、自己の活動し得ると思ふところの僅^{ワカ}少なる範圍内だけを認めて、出頭没頭して居るのである。

『宇宙の内に在る宇宙とは小宇宙なること當然なれば。人類は固より。萬物亦皆小宇宙なり。』

『宇宙の内に在る宇宙にして宇宙を知らず。人身にして人身の起伏往來を辨ぜずとせば。必竟亦之れ天地の間

に在りて天地を知らざるもののみ。』

まことに、我は小宇宙である。また、小天地とも呼ぶのである。が、不幸にして、天地の天地たることも分らねば、宇宙の宇宙たることをも知らず、迷ひに迷つて居る。迷ひながら、迷へりとも氣付かず、知らぬのに、知つたやうに振舞ふ。あらゆる悲劇が其處に起り、此處に演ぜらるるのである。

『人身人身を知らずとするも。人の靈念思考は斯くして安んじ得るものにあらず。』

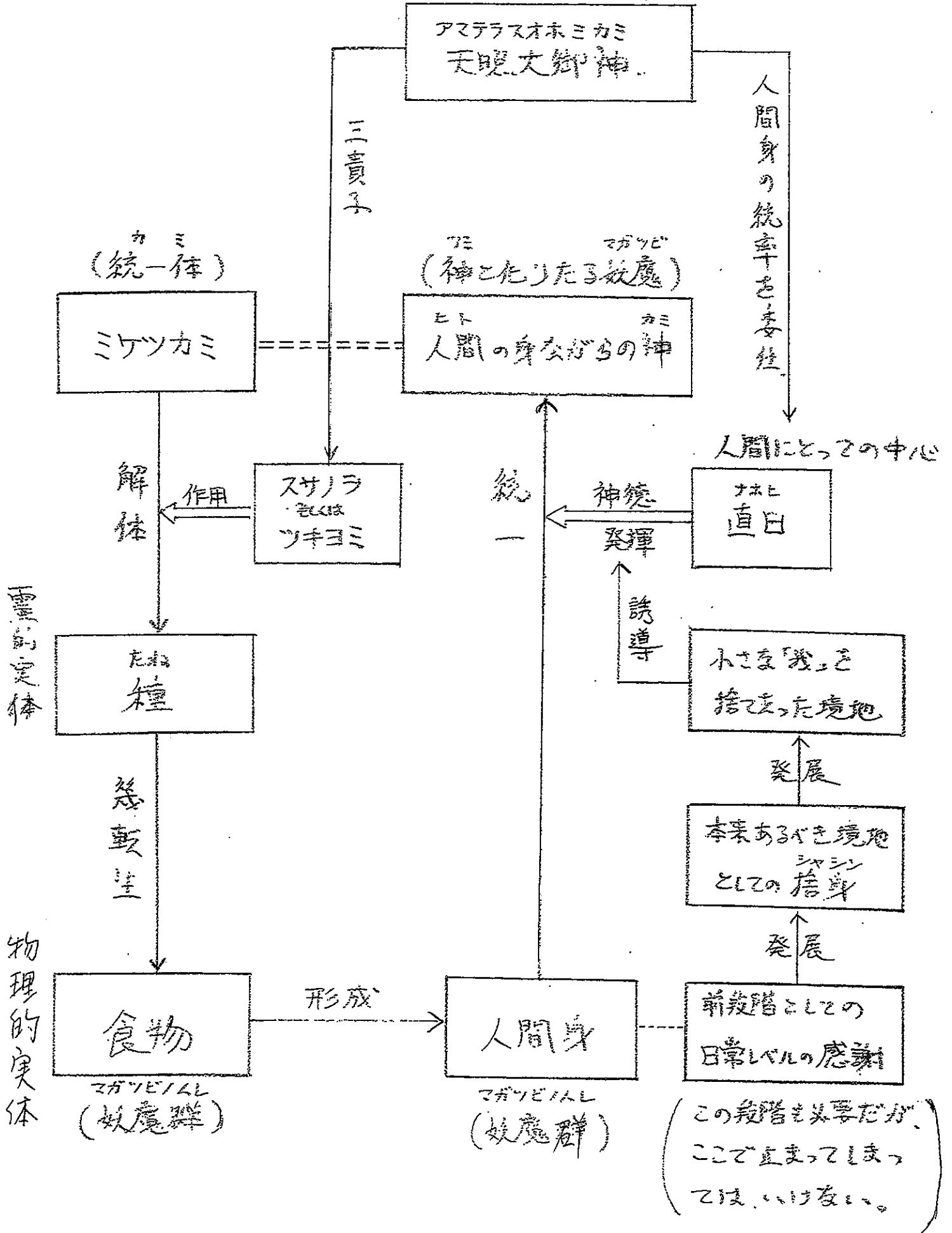
此の身と此の心とは、「神」を出でて相距ることの遠近親疎が有る。それ故に、此の身と此の心と、四分五裂して、或は正に、又は邪に、時には善に、時には惡に、美を思ふこともあり、醜を行ふこともある。「人身人身を知らず」。肉體身は、轉生又轉生して、神を距ること遠きが故に、偏見、固陋、狹小、猥雜で、所謂妖魔群である。妖魔であるから、其の身の妖魔であることをも知らずして、平氣である。

人間身を、轉生又轉生して、神を忘れたる妖魔群だと云ふことは、古事記、日本書紀、等に、此う書いてある。「速須佐之男命が、神夜良比夜良波所て、食物を、大氣津比賣神に乞はれた。すると、大氣都比賣神は、鼻、口、尻、などから、種種の味物を取り出して、種種と作り具へて、進時に、速須佐之男命が、其の態を立伺て、穢汚を奉進ると思召され、大氣都比賣神を殺された。すると、其の殺された神の身には、頭に、蠶が生り、二つの目には、稻種が生り、二つの耳には、粟が生り、鼻には小豆が生り、陰には、麥が生り、尻には、大豆が生つた。それを、神産巢日御祖命が、お取りになつて、種とされた。」之を、妖魔群だと云ふので、人類萬類の食物とするところのものは、此のやうに、轉轉變化した產物であるから、日神の高天原を出でて、幾轉生して居る。此の幾轉生した食物に依つて養はれた肉體は、つまり、妖魔群にほかならぬのである。けれども、人

間身は統一體である。統一體であるとは、「大國主神オホクニヌシノカミの兄弟たちミアニオト、八十神坐ヤソカミマシマしたれども、國をば大國主神オホクニヌシノカミに避りまつりき」と、古典にあるので判明ワカるやうに、八十神ヤソカミたる群衆魂の中心には、大國主神オホクニヌシノカミとして、八十神ヤソカミを統治し統率するところの主神が坐マシマすので、其の主神を、人間身の上では、直日ナホヒと稱へて、日神天照大御神ヒノカミアマテラスオホミカミの依さし給へる、「神カミ」にてましますのである。此の「神カミ」たる直日ナホヒが、中心に坐マシマして、全身心を完全に統治したる時、統一體たる實を顯彰アラハし得たので、人間身に攝取せられた妖魔群は、妖魔のままに、直日ナホヒたる神カミ 徳を發揮するので、之を、神カミと化りたる妖魔マガツビと呼ぶのである。それだから、我が直日の徳を發揮するか否かに依つて、食をも衣をも住をも、生かすか殺すかが別るるのであり、豐受比賣神トヨウケヒメノカミと成らしむるか、海鼠コの禍物マガモノとなすかの別も決キマるのである。

図表：人間身とミケツカミとの関係

全宇宙を統率する大宇宙の中心



觀じ來れば、一圓一音、昭昭琅琅の日であり、火であり、日止であり、火人であり、人である。

『哲人在り。宇宙の相を認めて曰く。宇宙は一圓相なりと。又云く。一音響なりと。』

古典の多くは、神話の形式を採つて居るので、例へば、「修理固成」「天沼矛」「鹽土翁」と並べた時、詞と、器と、人と、三様に思はれるであらうが、神代には、**無宇宙**、時間の長さも無く、空間の隔りも無く、耳と、目と、舌と、と云ふやうな、人間的の範疇を立てては居ない。従つて、「**光**は神なりき」と記され、やうに、「修理固成」と云ふ詞は、神で、「天沼矛」と云ふ器も神で、「鹽土翁」と云ふ人も神で、「嶋」も神で、「國」も神で、「海」も神で、「水」も神で、「火」も神、「時間」も神、「空間」も神、「木」も神、「草」も神、「野」も、「山」も、「血」も、「涙」も、「穢きもの」も、「好きもの」も、「無しと云ふもの」も、「有りと呼ぶもの」も、一切合切が神で、其の神が神魔と分れ、人天萬類と隔たるので、其の隔りたるものより見れば、森森羅である。其の牆壁を取り去つた時は、一圓光明の日である。日としては、人身的「しほつちのおぢ」も、器物的「あまのぬほこ」も、言論的「修理固成」も、共に等しく、神であり、神體であり、神音であり、神意であり、神勅である。神命として拜しまつる時は、神名で、神言靈で、それが、そのまま、神にてましますので、○と書きて、一圓相だと古老は教へて居る。之を、耳に聽けば、そのまま、一音響で、神音である。人間身とては、○と書くのほかは無いので、之を見て、輕卒に、瞑想裡の圓輪と誤認するものがある。一音響を梵音だ、か、海潮音だとか説明すると、また誤つて、佛陀の説法かと思ふ。

無宇宙におけるヒカリの説明。

兎角、俗人は、自分勝手に、他を解釋し批判しようとする。自己の力相應にするので、之も、止むを得ない。か知らぬが、我が身で、我が心で、我が物で、と云ふ執着を捨てて、天界地底を踏破することは、誰でも出來

全宇宙

多田山公遺稿

宇宙とは経緯である。

経緯の存在を云ふのであるから、在る物である。

経有り緯有る物なりとの義で支那人が此の文字を作ったのである。

現今の人々は、自分自分に、思ひ思ひに、古人の遺した言語文字を勝手な意味に用ゐる悪風が有るので、此の文字も、支那の古典としての使用法に據らず色色の意味に用ゐて居る。

或者は、太陽系だと云ひ、亦は有る限りだとか、人の知り得たる一切だとか、大虚空だとか亦或は仰ぎ見る限りだとか云つて居る。

成る程、其れ等は総べて経有り、緯有る物であるから、宇宙の外なるものではない。

けれども、之れ等は皆共に宇宙の外なるものを知らぬ人の云

ひ方である。

宇宙とは経緯である。

経緯の有る物とは箇體を指すので、大小長短広狭厚薄高低遠近深淺明暗凹凸強弱硬軟精粗疎蜜等の存在を云ふのである。

それ故に、太陽系だとか、大太陽系だとか、有る限りだとか云ふことではなくて、結晶體である。

日本の古典には之れを「産靈（むすび）」「魂（みむすび）」等と記し、各地方に「結神（むすびのかみ）」と称して奉祀されて居る。

玉の緒を結び結びて人の身は伊着くなるなる天安川。

それならば、その結晶體とは何が結晶したのか、結ぶとは何を結ぶのか、「産靈」「魂」とは抑、何であるか。

結ばれたる曉には宇宙であると支那人は傳へ、日本民族は「ミ」であると教へて居る。

「ミ」とは、身で、實で、稔

で、充塞で、三で、品で、で

、▲で、▼で、火で、水で、生で、死で、生死遷流で、「イノ

チ」で、「天命」で、「地風升」で、「風地觀」で、「水火既濟」で、「火水未濟」で、「地天泰」で、「天地否」で、「陰陽不測之神」である。

故に「ミ」即「神」である。

三は神であるから、三生「ミ」と傳へて、其の一とは十としての一で、皇で、九の統一體であるとの意である。

三即神で、即十で、即一で、即ヒ、即ミ、即ヒフミヨイムナヤコノタリヤモモチチミテリであつて全宇宙と呼ぶべきである。

統一魂神である十魂尊師である十種神寶で、完全に統治せられたる國である。

大國魂神で、大國主の主りましますところである。

世上、出雲系の神と称するは幽鬼妖魔が日神を拝して神と化したるを指せる名称なりしもの、何時の間にか人間身造作の神話と化したのである。

アチメアチメアチメアチメアチメ。

ヒフミヨイムナヤコノタリ

ヤモモチチミテリ。
アアヒガテンジンユウアイコウ。

八雲琴我が掻き鳴らす束の間を人こそ學べ身をば捧げて。

八雲琴我が掻き鳴らす神の聲神寄板に今日も昨日も。

フルコトノフミミチワケテワガヒクヤカミノヲゴトノコヲロコヲロニ。

「古」を「イニシヘ」と訓む。

過去の住處（すみか）との義で時間無きの時間、空間無きの空間である。

故に、無宇宙で、無人無境で、無始無終無盡無邊で、と支那人は描いたのである。

○は零で、靈で、十は $\oplus$ である。

$\oplus$ と○との合成であるから、○なる無宇宙と、 $\oplus$ なる宇宙とを图示したのが、時間と空間とを説明すると共に其の主體と活用とを默示したるものである。

之れを「カミヨ」とも「トコヨ」とも「タマシヒ」とも「タカマノハラ」とも云ふので、一

圓晃耀の日神である。

あちめあちめあちめあちめあちめあちめ。

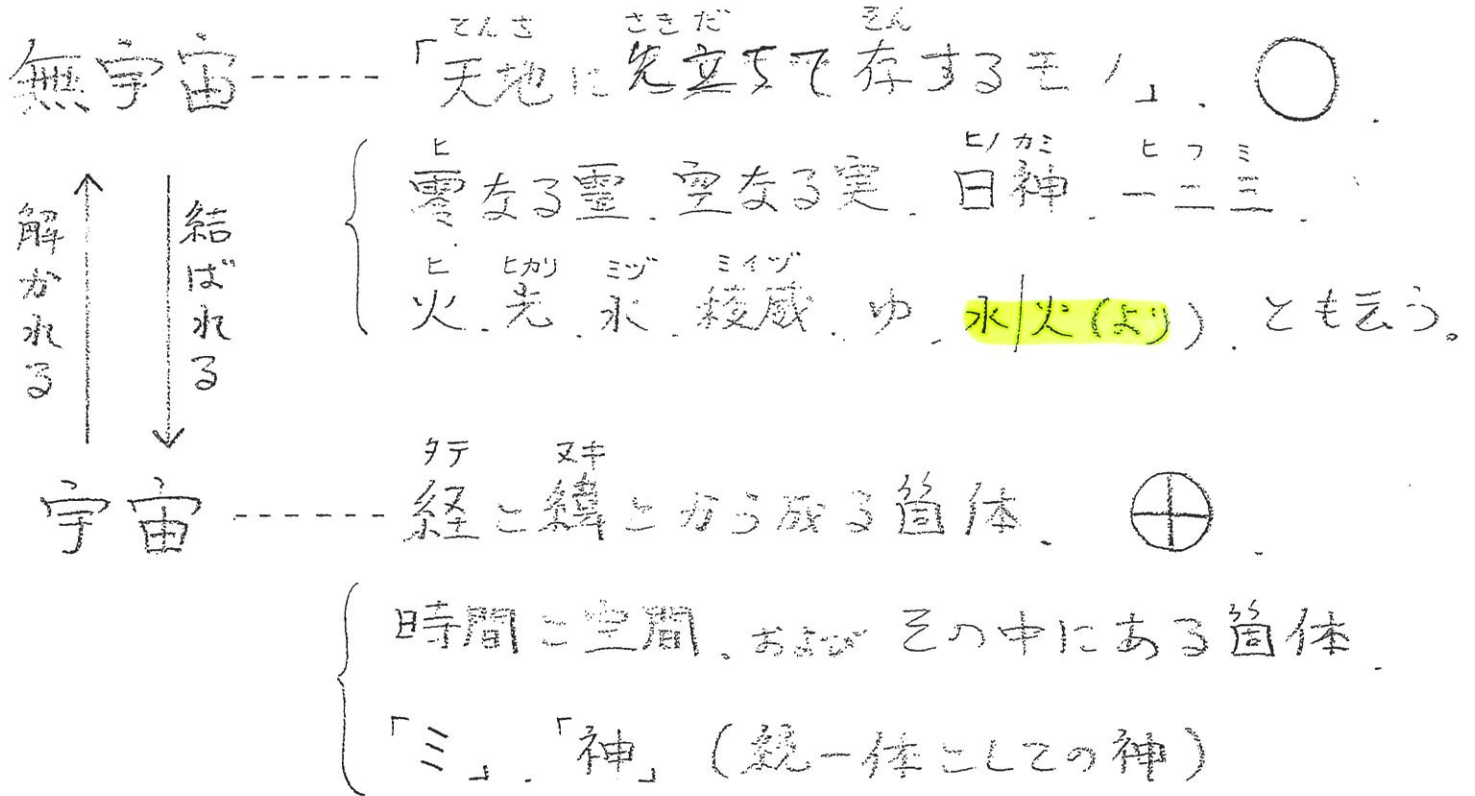
なりとは一(ひ)なる四(よ)

地の水にして、火水未済にして

昭和十一年九月二十三日

以上

秘稿「全宇宙」のまとめ



また、多田雄三は「古」という漢字を「十」と「口」とに分解した上で、その「口」は ○ の楷書であり、その「十」は ⊕ の省略形である、と解釈している。

- { ○ ----- 無宇宙。零で霊で。時間や空間を脱却して
それらを産み出しているところの「主体」。
- { ⊕ ----- 宇宙。上に述べた「主体」の「活用」として
表出されたところの時間と空間。

全宇宙 (二) より

ヒ 太極、零^ヒなる一^ヒ
↓
ヒ^二 兩儀、二^二、(二^二にして一^ヒにして)
↓
タマ 四象、三^ミ、四^ヨ、(一^ヒなる四^ヨ)、一^ヒ二^二三^ミ、ゆ

(火 (二)) ----- 「エホバ」
| 水 (三)

→ 以上まとめて「天地^{てんち}に先^{さきだ}立^たてて存^{ぞん}する物^{もの}」

「陰陽不測之神」

以上、すべて「無宇宙」の話。

拙稿「数理 (一) のまとめ」参照。

無

ヒの段階

↓
ムスビ
産靈

種子の種子 (イムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ)

→ 一^ヒ、火^ヒ、零^{ヒウミ}海の零^ヒ (太極)

宇

ビの段階

↓
ムスビ
産魂

種子 (イムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ)

→ 二^フ、經^フ (經過) (兩儀)

宙

タマの段階

発芽したる種子 (イウタマ、タルタマ、タマトマルタマ)

→ 三^ミ、身^ミ ; 同時に、四^ヨ、世^ヨ (四象)

(ヨは無宇宙と宇宙の間を遷流する)

ミヅガキ
瑠垣

「完全に成立した箇体」の段階 → 五^イ

宇

{ 中心 ----- 種子 (ヒフミヨ)
外郭 ----- 資料 (ム、空零、ウシビ)

宙

→ 即ち「空零」とは、まだ「箇体」の中に組み込まれていない、「遊離した資料」である。「零^ヒ」と同質ではあるが、もはや「中心」を形成する可能性はなく、その点が「一^ヒ」とは全く異なっている。

<「ヒ」の存在様式の三段階、まとめ>

()内は「言霊の幸」の頁数、()内は「修験講要録」の頁数。

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの。○

これらは

純一不可分の^ヒ零(90) 純一不可分の^ヒ霊(80)

ミムスヒ イウミスヒ タルミスヒ タマフメミスヒ

三産霊 (生産霊 足産霊 玉積産霊)

ミタマ

実としての御霊 (以上、130)

内在する作用力と
ヒカリと称する。
その活用は順次
より下の段階へと
作用し、最終的に
宇宙の側にまで至る

これが ↓

2. ○と○との複合体。◎ (136) ① (68) ② (72)

ヒ

タマノヲ、ミヅホ、イノヲ、千變万化する^{ラシビ}靈魂「ヒの活用」(89)

ヲテ スキ ラ メ × ×

経と緯 男と女 凸と凹と(91) タカミムスビとカミミムスビ(68)

ミムスビ イウミスビ タルミスビ タマフメミスビ

三産魂 (生魂 足魂 玉留魂)

ミタマ

身としての御魂 (以上、130) 三不可分の^ヒ魂(80)

ヒカリ

その種子が ↓ 芽をますと(84)

3. 體としての成立。◎ ③ ④ (36) ⑤ ⑥ (78.末)

ミ ヒ ヒ

ヲテ スキ

経と緯との相交わりたるもの(91)

ヒ イウタマ タルタマ タマフメタマ

不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 (生玉 足玉 玉留玉) (80)

人間身の上では 根本魂(ナホヒ)直日(直日) (132)

無宇宙

これも、しばしば 御魂と称する。
ミタマ

「こ」の内外に於ける二儀/台、よこのめ
 () 内は「言霊の章」の頁数、() 内は「修練講演録」の頁数

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの ○

統一不可分の^ヒ零 (90) 統一不可分の^ヒ霊 (80)
^{ミムスヒ}三産^ヒ霊 (^{イウムスヒ}生産^ヒ霊 ^{タルムスヒ}足産^ヒ霊 ^{タマフムスヒ}玉續産^ヒ霊)
^ミ実としての^{ミタマ}御^ヒ霊 (以上、130)

これが ↓ ^{ムスビムスビ}産^ヒ霊産^ヒ魂て

2. ○と○との複合体、^ヒ◎ (136) ^フ◎ (68) ^{カミ}◎ (72)

タマノヲ、ミヅノ、イノヲ、イ変乃化する^{フシビ}霊魂、ヒの活用 (89)
^{フテ}経と^{フテ}緯、^ヲ男と^メ女、^メ凸と^メ凹と (91) ^{タカミムスビ}タカミムスビと^{カムミムスビ}カムミムスビ (68)
^{ミムスビ}三産^ヒ魂 (^{イウムスビ}生^ヒ魂 ^{タルムスビ}足^ヒ魂 ^{タマフムスビ}玉留^ヒ魂)
^ミ身としての^{ミタマ}御^ヒ魂 (以上、130) 三不可分の^ヒ魂 (80)

その種子が ↓ 芽をますと (84)

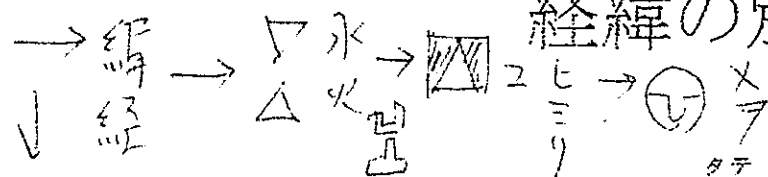
3. 合体としての成立、^ミ◎ ^ヒ□ ^ヒ□ (36) ^{マヲ}◎ ^ヒ◎ (78.末)

^{フテ}経と^{フテ}緯との相交わりたるもの (91)
 不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 (^{イウタマ}生^ヒ玉 ^{タルタマ}足^ヒ玉 ^{タマフタマ}玉留^ヒ玉) (80)
 人間身の上では ^{ナホヒ}根本^ヒ魂直^ヒ日 (132)

無宇宙の表現

	イクムスヒ 生産霊 (中心)		
ヒ の 段 階	+		
	タルムスヒ 足産霊 (外郭)		
	↓		
	タマツメムスヒ 玉積産霊 (全体)	中心となれば、	
ヒ の 段 階	このタマツメムスヒが⇒	生魂 イクムスヒ +	
		外郭となれば、	
		足魂 タルムスヒ	
		↓	
タ マ の 段 階		全体を称して 玉積魂 タマツメムスビ このタマツメムスビが⇒	中心となれば、 生玉 イクタマ +
			外郭となれば、 足玉 タルタマ
			↓
箇 体			全体を称して 玉留玉 タマトルタマ

経緯の別名



経緯の別名

幸51、91頁より

あらゆる「筒体」は、必ず「経」と「緯」とから成る。

各々、別名は次のとおりである。

「経」・・男（陽・雄・凸）、宇（時間）、「か」（天・乾）、父、いち

「緯」・・女（陰・雌・凹）、宙（空間）、「み」（地・坤）、母、に

「大宇宙そのもの」や「零そのもの」は、「筒体」ではない。

多数の「零」が集積して、一定の内部構造を獲得した段階を称して「筒体」と云う。

その構造は、「中心と外郭」という形で捉えることができるが、「経と緯」という形で捉えることもできる。

あえて言うならば、後者は「筒体の成立過程」を理解するための考え方であり、前者は「筒体の完成形」を把握するための考え方である。

また、神話では、「経」のことを「成り余れる処」と、「緯」のことを「成り合わざる処」と表現している。

その両者が合体して一個の「筒体」が成立したことを表現した図象が  である。

『修禊講演録』第五 84頁より

『この種子の種子さ、^{イウムスビ}生産霊と呼ぶ。

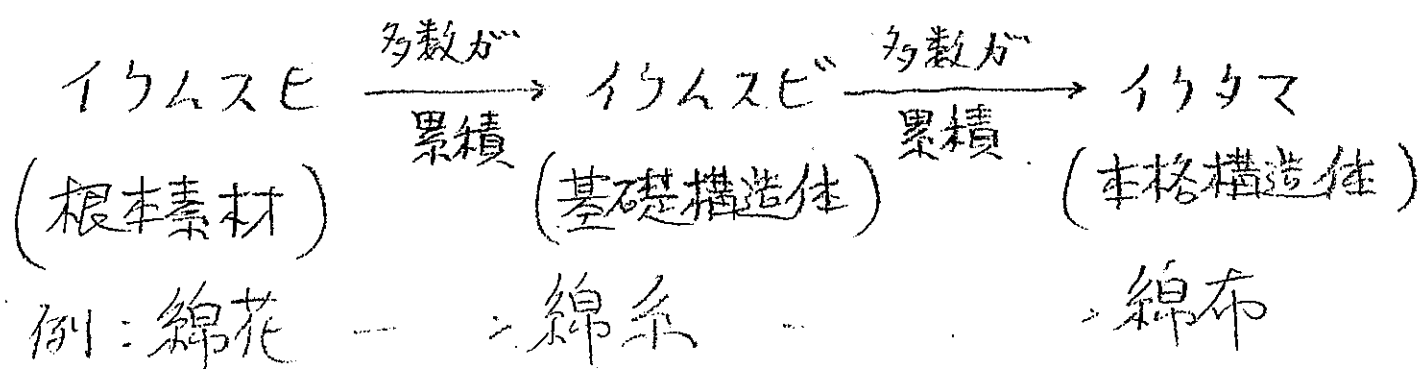
この種子さば^{イウムスビ}生魂と呼ぶ。

この種子が芽を出す時、それを^{イクタマ}生玉と呼ぶ。』

解説：この宇宙に存在する万物は、実のところ、無宇宙の側に
実在する「霊的な実体」と「^{もと}元」にて成り立っている。^{もと}元なので、
これを象徴的に「種子」と呼ぶ。

これは具体的には「イウムスビ」と呼ばれるが、実は、
これもまた「イウムスビ」(^ヒ零^ヒこのもの)から成り立っている。

また、この「イウムスビ」が累積し、^{ミツガキ}瑞垣を超えてこの宇宙
の中へ作用を及ぼすようになると、それは「イクタマ」と
呼ばれる。その状態を象徴的に表現して「種子が芽を
出す」と云う。



『修禊講演録』第六 93頁 参照

ほか、『言霊の幸』72頁や『古事記』底本51頁も参照

「零界一点の火」(^ヒ無宇宙の零の海に遍満する「零」そのもの)

→ ^{コトアマツカミ}別天神 (コトアマツカミとしての) ^{ヒノカミ}日神

神ならざるの神、神魔同凡の天御鏡 (^{アメノミカガミ}幸. 72頁)

^{ヒトハシラノカミ}独神 ^{カクリミ}隠身 ^{ヲノカギリ}純男 ^{ミヅハノメ}罔象女 (幸. 196頁)

無経無緯の高玉座 (幸. 200頁)

→ 以上の用語はすべて、無宇宙の「ヒ」を指し示している。

これを二柱としては (その位置や役割によって大きく

二通りに分けて考えれば) 「タカミムスヒ・カムミムスヒ」と

称し、また三柱としては「イクムスヒ・タルムスヒ・タマツメムスヒ

と称する。だが、それはあくまでも「その時その時の」

位置や役割に応じた名称であり、決して個々の

「零」同士が互いに本質的に異なっている訳ではない。

「零」そのものは、あくまでも「統一不可分」なのである。

80頁より.

{ 純一不可分の^ヒ靈 ——— 生産靈・足産靈・玉積産靈 (コトアマツカミ)
(カウリミ)
三不可分の^ヒ魂 ——— 生魂・足魂・玉留魂
不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 ——— 生玉・足玉・玉留玉 (アマツカミ)
(ウツシオミ)

83頁・93頁より.

^ヒ零 は大宇宙に遍満する實在. ^{コトアマツカミ} 別天神. ^{カウリミ} 隱身. ^{ヒノカミ} 一神.

↓

結び結びたる^ミ身. 万類万物. (^{アマツカミ} 天津神 ^{ウニツカミ} 国津神.
八百萬魂神 (各人各自)
ヤホヨロヅミタマノカミ

85頁より.

「カミ」は「三不可分の^ヒ一」で、「○」と描き、「日」と称へ.

^{アマテラスオホミカミ}

「天照大御神」と拝みまつところの「根本本体. 標識基準」である.

^{フメノミナカヌシノカミ}

^{モモヤホヨロヅミタマノカミ}

開きては「天御中主神」であり. 結びては「百八百万魂神」である.

89頁より.

{ ○^ヒ (単数) 一円光明の^ヒ零. 「澄み切りたる」. ^{カウリミ} 隱身.
◎^ヒ (複数) 零が^ヒ零のままだに「結び結びたる」もの. (ウツシオミ)
(こうした結合力は^ヒ零これ自体の中に内在)

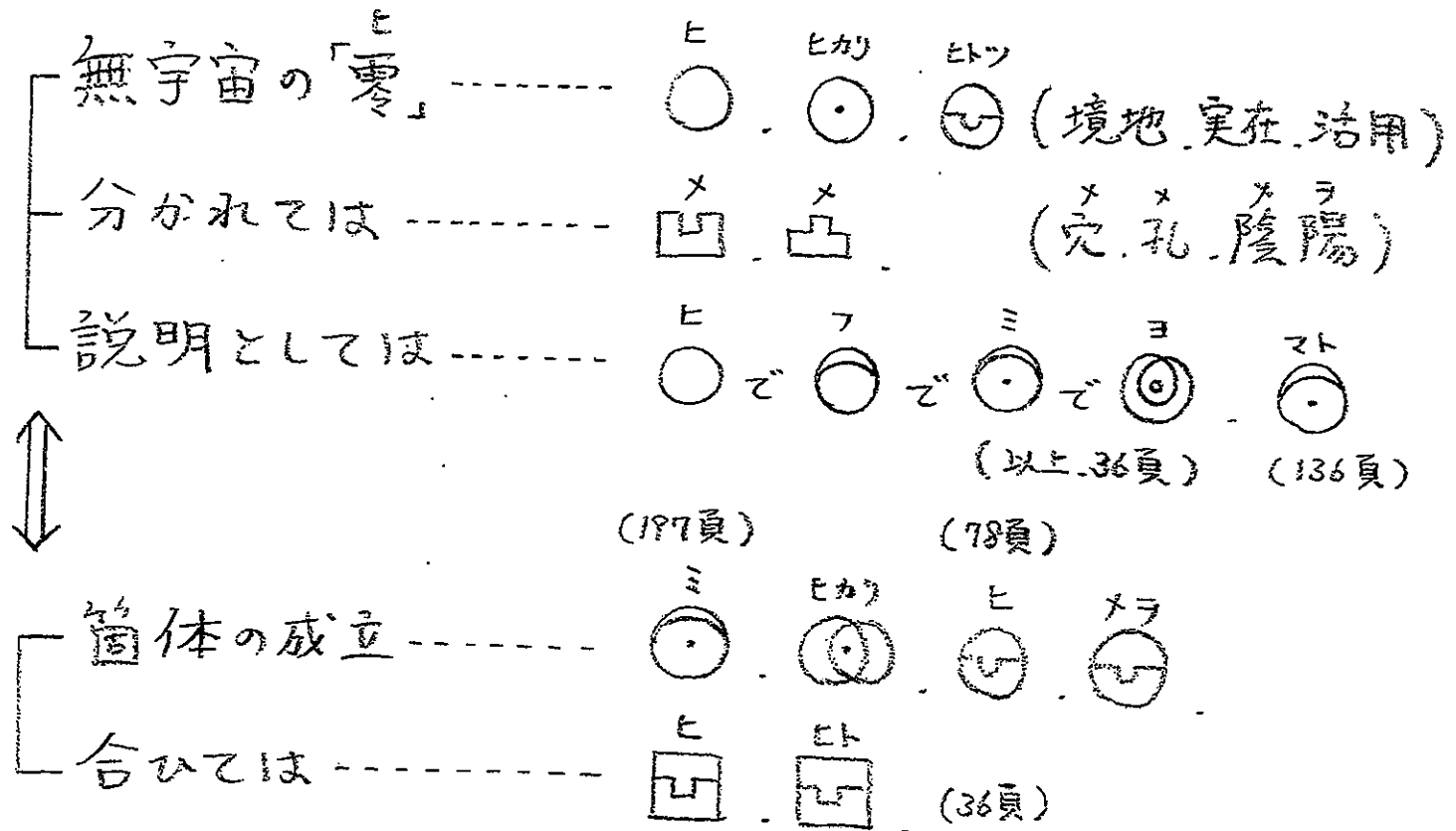
→ ○^ヒ であり ◎^ヒ でもある ^{ヒノカミ} 日神を ^{アマテラスオホミカミ} 「天照大御神」と称へまつる.

ムスビ^{ムスビ} ムスビ^ミ
「産霊産魂たる身」(箇体としての宇宙を築き成した存在)

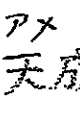
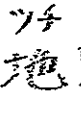
→ アスツカミ^{クニツカミ} ヤホヨロヅ^{ミタマノカミ}
天津神・国津神・八百万魂神

(^{カミ}神 と ^{マガツビ}魔 との相対としての) 神.

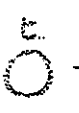
(前頁の別天神とは区別せねばならない)

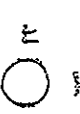


(76頁)  神 -----  別天神としての「天祖」を表現

"  神 -----   天成り地定まりたる後の天津神としてのへ

(78頁)  神 -----  国 (外郭.  で表現) を統べる中心
(146頁)
としてのヒノカミ. ( ととも表現)

(197頁)  ----- もはや  ではない身. (管体)

(198頁)  -----  に等しき身. (天津神. 完成された管体)

万有は○の結び結はれたるもので、此の○の結ぶの助道を司る神を「シホツチノオヂ」と称へる。即、万有は「シホツチノオヂ」の結び成すがままに成立するのである。

「カガミノフネ」とあるのは「境地」で○であるから「零海」とも「大平等海」とも記された所以である。

それで、「シホツチノオヂのカガミノフネにのり」とあるのも神話の形式を踏まれたためで、ホヲリノミコトがミソギせられし結果、此の五体を解き来れば一切が○で、今までは手だ足だ頭だ胴だ腹だ背だと思つて居たものがすべて○の集散離合にほかならぬことを悟証られた。そこで、唯見る一切合切は「大平等海」たる「零海」で、其処に認めたる我は「鏡の船」に乗り白玉晃耀の一円象を現出したのである。是れ則、「タマのオヂにはいられた」もので「そのオヂはタマばかりで、そのタマのひとつひとつに(ヒ)がもえてをる」ものであると信ずるのである。

「その(ヒ)は永劫不変の日」だとは、「日」即「☉」はすべてのものの種子であるから、万有が何如に変転しようとも、此の種子は変らない。

「不断起滅の火」だとは、「○」を基準とするが故に何如に変転しても尽きない。則、尽無尽で、滅不滅である。「極大無限の零」だとは、累積の極に至つてその空なるを悟証するのである。

「極底最下の氷」だとは、分割の極に到達すれば空不空にして唯一点の「我」なることを知るものである。

「無尽無量の一」だとは、極大極小無限にして唯是れ是くの如きの「物」であることを示されたものである。

此の故に、「従つて是れは唯一で無限で最大で最小で無で有で空で実で、大宇宙と呼ばれるのである。」と記されたことと拝読するのである。

如是一円光明の零界は純真無雜の神界樂土で、日本語の「タカマノハラ」で、其の主神は天照大御神で、其の

斯くて、人天万類の種子は、如是の ㊦なる神であるから、それは、正でも邪でも、善でも悪でも、美でも醜でもない。それ等総べてを發現し得べき「伊邪那岐・伊邪那美」である。

それ故、此の種子と、此の種子から発芽し育成した総べてとを、「神魔」と呼ぶことが出来る。即、「陰陽であり、乾坤であり、天地で、男女で、雌雄で、凹凸で、悲喜で、哀楽で、卑高で、明暗で、昼夜で、乾湿で、畢竟如是である」。之レを「這箇」と古人が呼んで居る。

此の「這箇」とは、本来空なのだから、時として、処に依り、狐も出れば狸も躍る。さうしてそれが、狐は狐だと自覚し、狸は狸だと自認すれば、そのままに善美正誠だが、その狐や狸やが、若しも、我は人だと云ふならば、直に醜惡邪曲であり、従つて世を毒し人を迷はす。

なにとぞ、狐狸は狐狸らしくして、人の真似は為ないやうにと切望する。

庶幾はくば、雜糅なる神魔を剖割して、普ねく同凡に在らしめたい。

「神魔を剖割する」とは、善惡美醜正邪曲直を判別するので、「同凡に在らしめる」とは、剖割されたる神魔をして、相互に相互の位置分限を干犯冒瀆することの無いやうにするのである。その暁を讃嘆して、日本古典は「天地初発」とか、「天地初判」「天地剖割」「天地開闢」「天成地定」などと教へられたのである。

之レを箇人の上で言ふならば、「直日開発」で、「日神生誕」である。

さうすると、物と云ふ物一切の牆壁が無くなる。境界が撤去される。それは、大字大宙そのままであるが故である。真なる學問とは、之レを目標として出發したもので、真摯なる学徒は、亦必や此の自覺を持つべきである。然うして、その「境界牆壁の無い」とは、火であり、光である。数で云へば零であり一である。日本古典は、

此の胎中に養ひ育てられたる神を第廿五神界の主神と称へて、日本古典には「天津彦彦火瓊瓊杵尊」と伝へたのであり、その御親神天忍穗耳命とは廿四の零神ヒノカミにましますので葦原中国アシハラノクニには御降臨遊ばされなかつたことが判明するのである。が、之レは「神代紀」の伝へだから人間身の事でも人間世界の数理でもない。人間身が既に忘れ、未知らざる奇振岳クシフルタケの秘事で、「零神ヒノカミ」としての御生誕である。

零ヒの神の御生誕を、古事記はその巻頭に隱身の神として、日本書紀は純男として、旧事本紀は天祖として、各々僅に数言を載せ、次ぎには、魂タマの神の御事蹟が記されてある。ところで、現在の古典は、まことに不幸にして、神界の事理を知らざる俗学者に潰され、零ヒの神と魂タマの神と身の神と身魂ミタマの神と人畜動植鉱物等との判別も無い雜糅混淆の記載と成つてしまつた。為に、後学は全く津梁を失ひ五里霧中に彷徨するの悲嘆を繰返して居る。此の霧を掃ふに「米コメ」の秘事が有る。それを、瓊瓊杵尊隱身の神伝と教へられたのが現存行事の「散米の祓」である。

祓去り祓来れば、あや奇しくも「天成り地定り、高天原は成り成る。」「その一点を上げば、神聖国常立尊である」とは日本書紀の伝である。「その一神とは、天アメノミコサ 祖天讓日天狹霧国禪日国狹霧尊である」とは旧事本紀の伝である。「その時の神は、隱身天カクリミ之御中主神である」とは古事記の伝である。「並び給ふ神としてはましまさねば、天照大神と称へまつるのである」とは古語拾遺の伝である。卒然として之等各々を読めば各々別々の如くである。

けれども、是くの如くそれぞれが皆共に「一」である。日本語では等しく之を「ヒ」と称へて有るかぎり在らんかぎり一切合切との意である。乃、「大宇宙」である。人天万類は各自各自に大宇宙としての起伏波瀾である。

ことを明らめ得たる時、各自各自分分個個としての入天万類がそのまま、身魂ミタマであり魂タマであり零ヒである事実を顕影して一円光明の○と成る。

「各自各自が○と成り得たる時、緯ヰとしては神界カミで経タテとしては神代カミで経緯タテヌキを合せては十カミで、共に「二」である。之を「日」であり「日神」であり「人」であると云ふ。その「人」とは、「日止」であり「火人」であることを教へて⊕と描き田とも◇とも品とも品とも曰とも串とも申とも伝へて、☐たる示である。そうして又、☐☐☐と画するのは伏羲の所伝を敷衍したので「湯」であり「ユ」である。それを日本の古典には「中津瀬」と伝へて純真無垢の一点で中心であることを知らしめてある。之を「否ヒなり」と呼ぶ。「そのやうなものの有るのではない」との義である。

珍重珍重。如是の「否」。如如起滅。怪奇至極。故に呼んで「神」となす。之は支那人の「无方」と云ひ「陰陽不測」と称するところの「神」である。

世界の学者中には此のやうな「神」は日本人云ふ所の「カミ」とはまるで別だと云ふものが多い。さうして、古典所伝の「零神」を忘れようとする。

先聖の教へ遺された大道に荆棘を植ゑ牆壁を築いて神道は民族信仰だなどと呟く。それだから偏狭固陋で役に立たない。

その現状を觀れば「何処へ行くのか」と愁へざるを得ない。世界人類は、太古の神伝を忘れて小我の邪見に繋縛せられ相互に鬭争殺戮の惨劇を演じ来つたのである。魂の神としての天照大御神には、之を「かしこしと思召されて」天窟に挿し隠らせ給ふ。「天の下皆闇し」とて、八百万神は高御産巢日神の御子の御教へを仰ぎつつ「大

未来324頁より

緯対 — 神界^{カミヨ} (空間) } 神代
経対 — 神代^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字

大切なのは、「カミヨ」ということだ。 (無宇宙)

「^{カミヨ}神代^{カミ}の神」は、「無宇宙の^{ヒノカミ}零の神」の意味。

同頁. 3行目. ^{意味} (人間が無宇宙のヒノカミと同じ
境地に立った。その時には、
「各自各自が^ヒ◎と成り立ち時。へ」

以下は、その境地を表現した文。

秘稿「祖神と主神」に即して言えば、

^{ヒノカミ}◎としての、神代五代の境地である。

→ 途中は文学的表現で、

実際の述語は、末尾の「^{カミ}十で、(共に)^ヒーである」である。

(2020.10.20. 追記)

無宇宙

神魔同凡

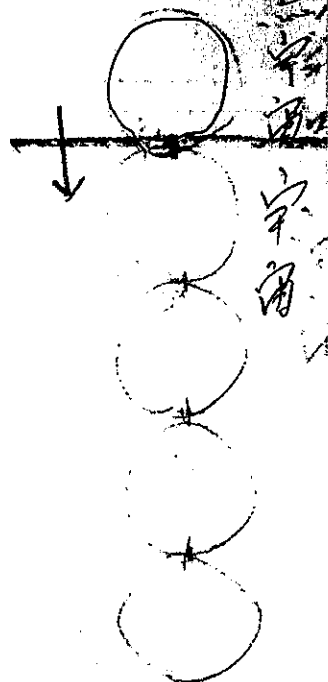
② が結ぶ結ぶで成り成る (末104)

宇宙

神魔判判 (幸113)

カミ マカデ 野
神も魔も 經と 緯のある存在。

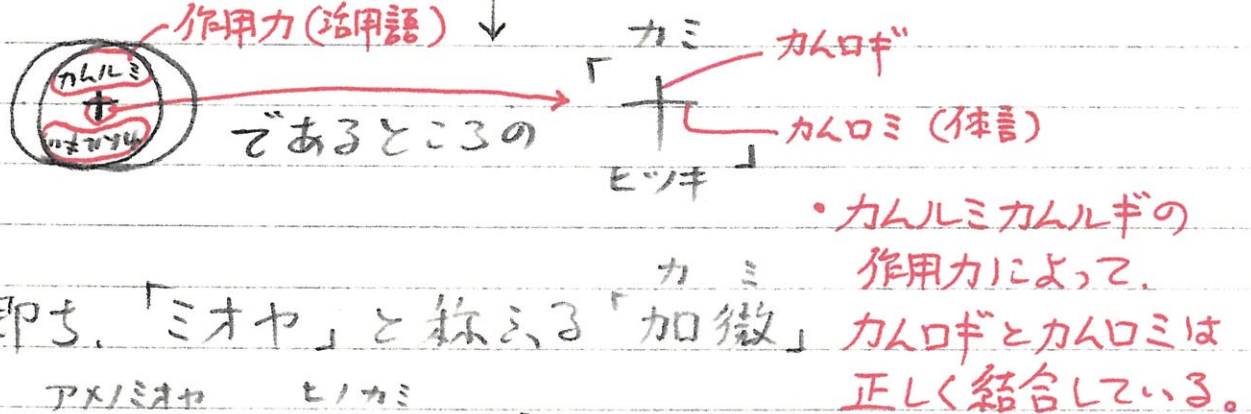
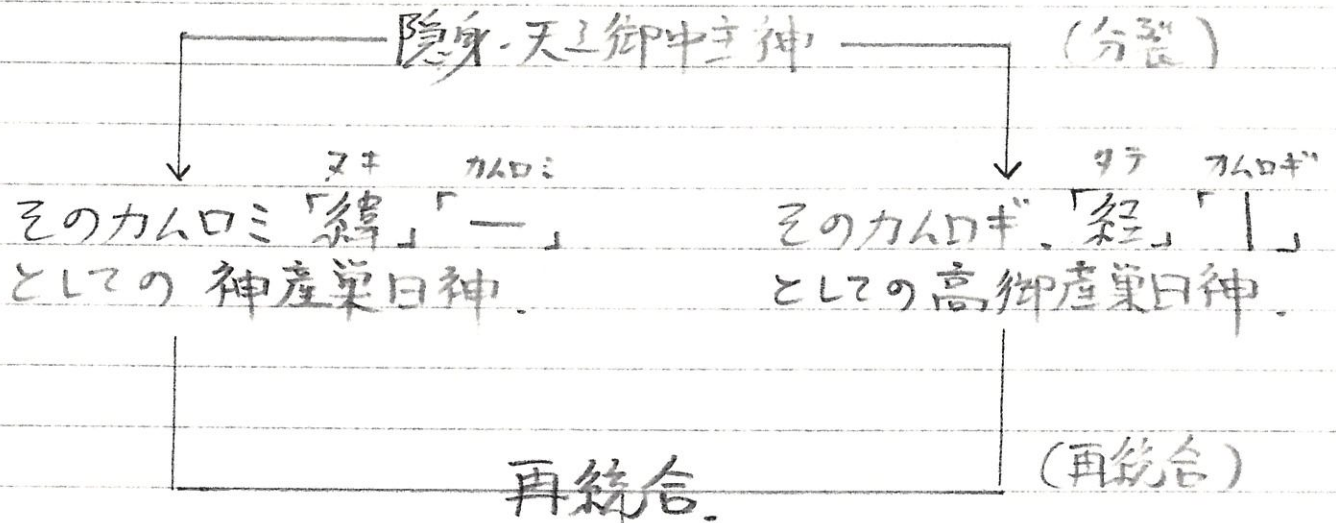
- (神 — 伊邪那岐神の神界 (顕界神域)
 魔 — 伊邪那美神の魔境 (幽界魔境)
 (末104)



未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230

『この「十」と結び結ぶ(元としての)隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加微」

⇒天祖や日神を意味する。

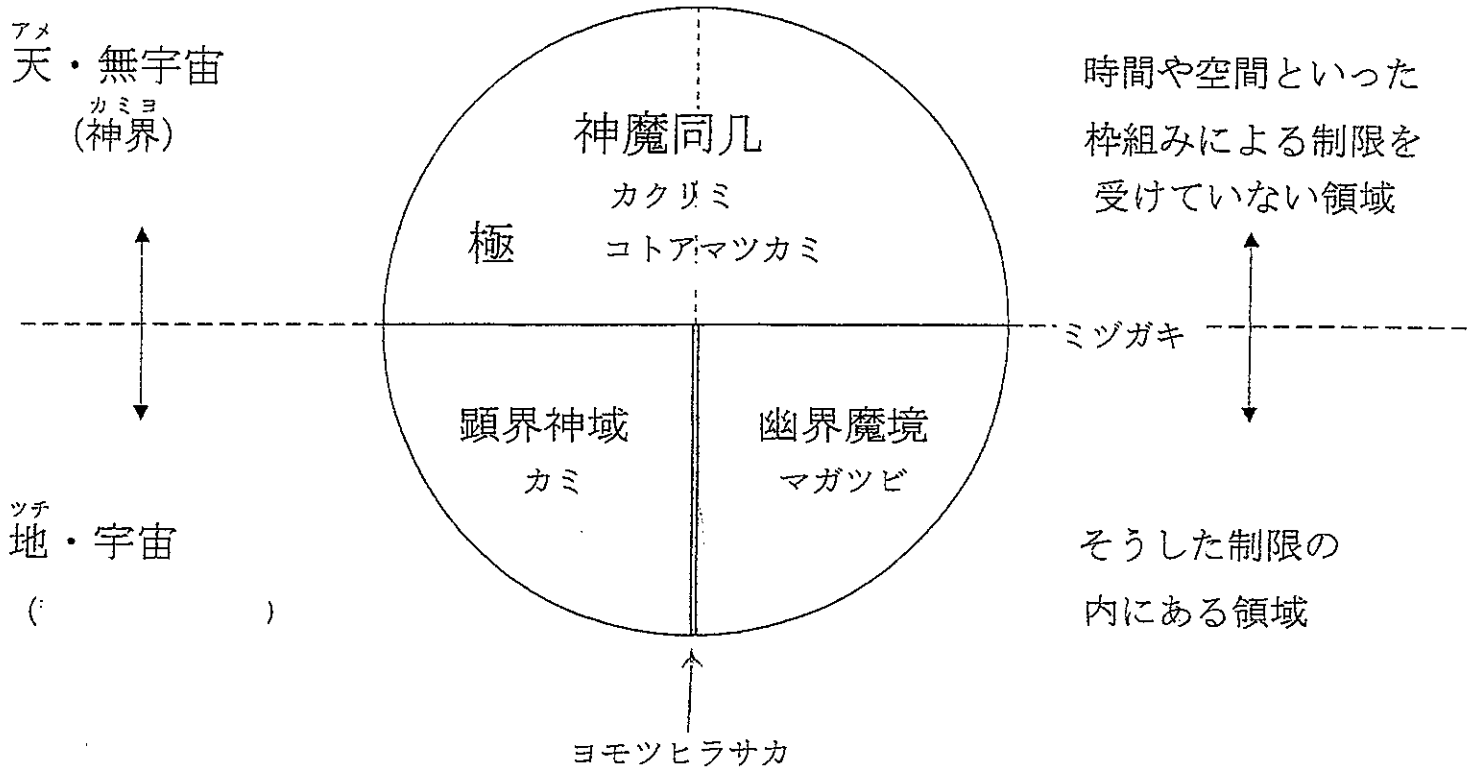
典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

アマツチ
天地概略図

アメとツチを合せて、大宇宙と称する



この二項対立の図式は^{ツチ}地の側でのみ有効

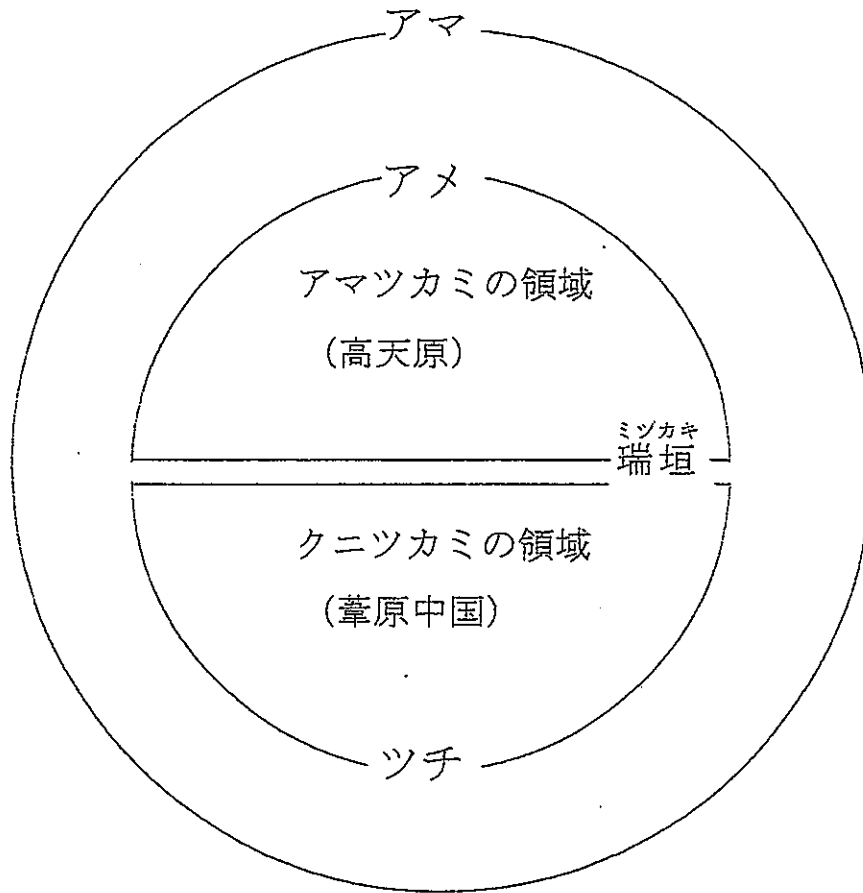
^{アメ}天の側には及ばない

^{アメ}天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域

^{アメ}天とは、物理的に言えば、宇宙創世以前の領域

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



○「高天原」^{タカマノハラ}は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の^{ナカツクニ}中津国) と幽界魔境 (マガツビの領域、^{ヨモツクニ}黄泉国) とに分かれている。

(第一版を参照)

1.

2.

無
字
留コトアマツカミ
(カクリミ)アマツカミ
(ウツシオミ)ミ
ノ
カミ三
貴有
留有
留

クニツカミ

ツマノカミ

子

上半分は一つにまとめて
「天祖・天照大御神」。下半分は三つに分けて。
「アマテラス・ツクヨミ・スサノヲ」

ミノカミ

ミタマノカミ

ヒトノカミ

無宇宙-----コトアマツカミ 別天神の神界 (言霊の幸 265頁)

{ 時間や空間を産み出す「本体としての^ヒ零」
「根本種子」としての「零界一点の^ヒ火」

→ 数理としては、まず一点の存在なので、^ヒ一。

その^ヒ零には必ず三通りの活用 (イムスヒ、

タルムスヒ、タマツメムスヒ)があるので、^ミ三。

また、宇宙を構成する際には、それに先立って

必ず^{ヲテ}経と^{ヌキ}緯との「二種類^{ふたつ}の^{もの}存在」になるので、^フ二。

即ち、「^ヒ一^フ二^ミ三」という用語は、実際には

しばしば「無宇宙の^ヒ零」を表現している。

→ 但し、「^ヒ火^フ経^ミ身」と表記した場合には、

『一点の^ヒ「火」が^{ムスビ}産^{ムスビ}霊産魂という過程を「^ヘ経」て

「^ミ身」を築くのだ』という内容を表現する。

(修禊講演録 93頁)

宇宙 ----- 時間と空間とから成る。(幸、265頁)

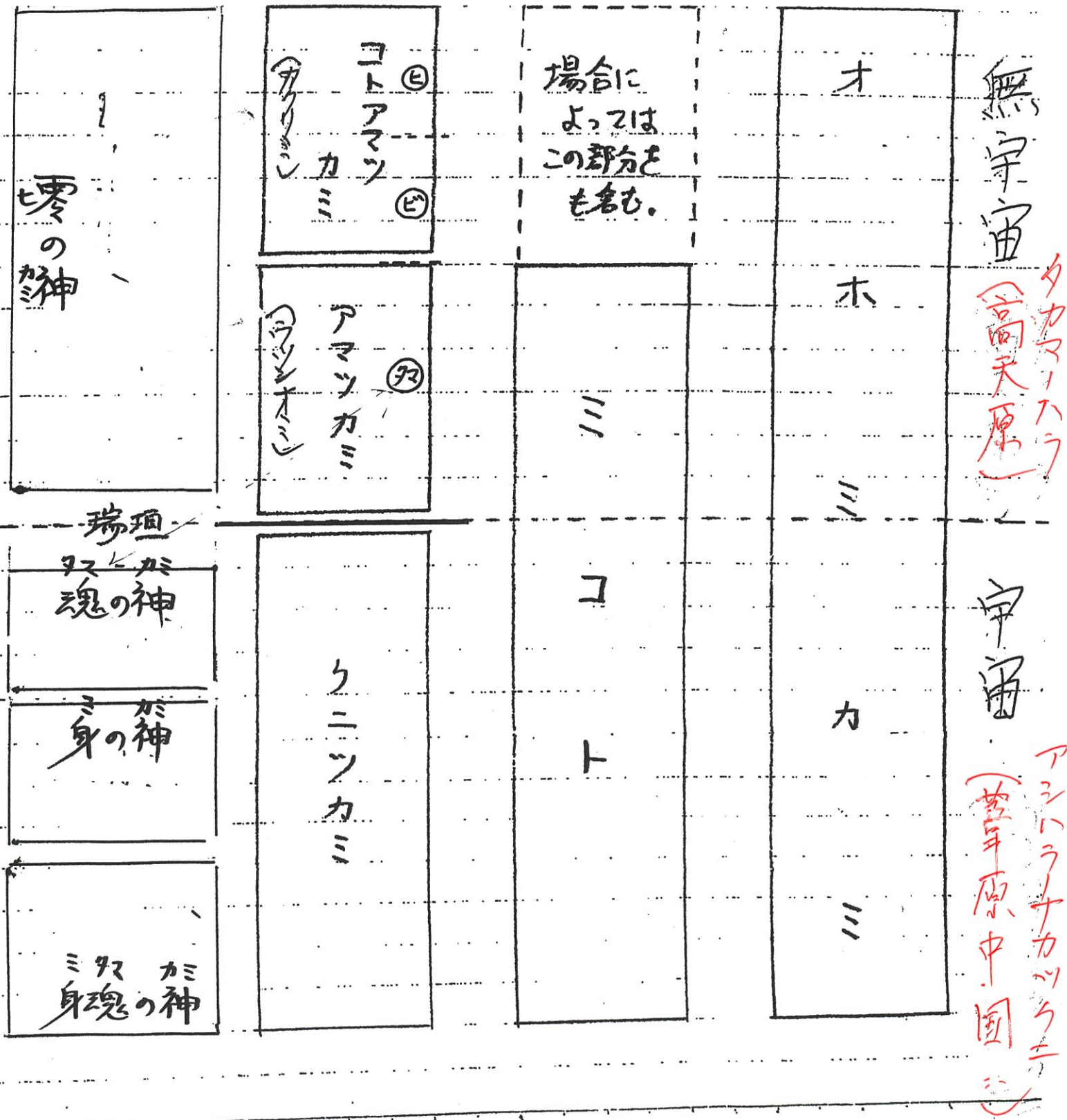
{ 破壊と建設、死と生とを繰り返す。
つまり「遷流」する。(「数理」、2頁)

→ 数理としては「四」であり、「十」でもある。

この「零なる四」を「最大最小」と称するの
に対し、「無宇宙の零」を「極大極小」と云う。

(「日月伝」ほか)

概念図



1.

2.

無字
留コトアマツカミ
(カサリミ)アマツカミ
(ウツシオミ)ミ
ノ
カミ三
貴有
留有
留

ウツツカミ

ツマノカミ

子

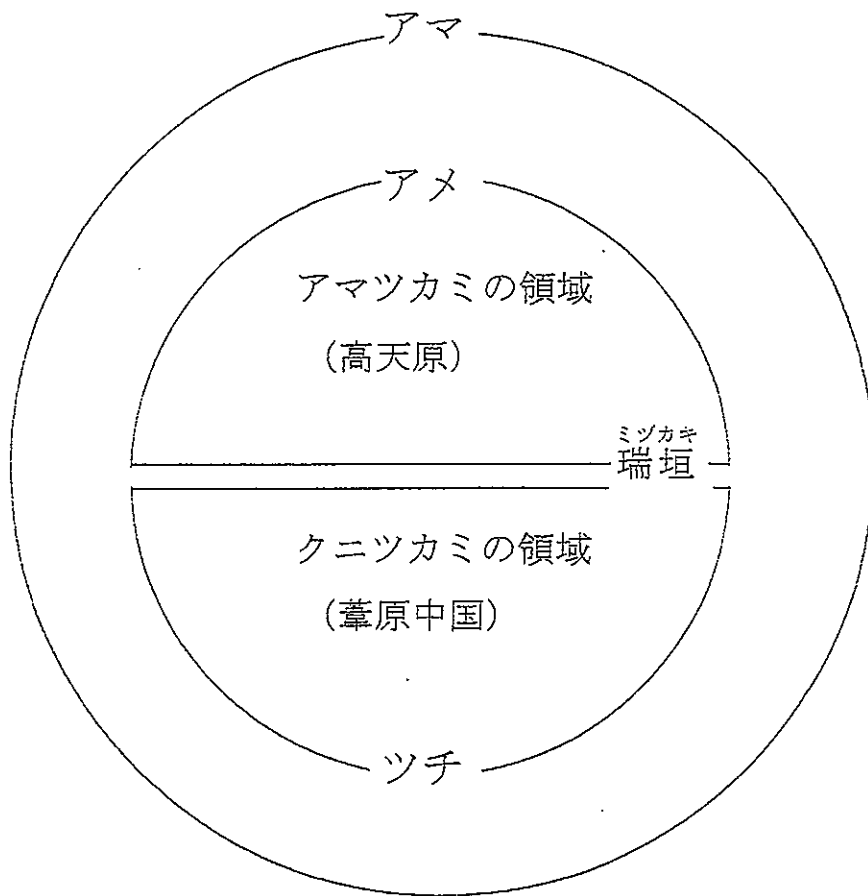


上半分は一つにまとめて
「天祖・天照大御神」。

下半分は三つに分けて、
「アマテラス・ツクヨミ・スサノヲ」。

ミ
ノ
カミミ
タ
マ
ノ
カミミ
ト
ノ
カミ

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



○「^{タカマノハラ}高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の^{ナカツクニ}中津国) と幽界魔境 (マガツビの領域、^{ヨモツクニ}黄泉国) とに分かれている。

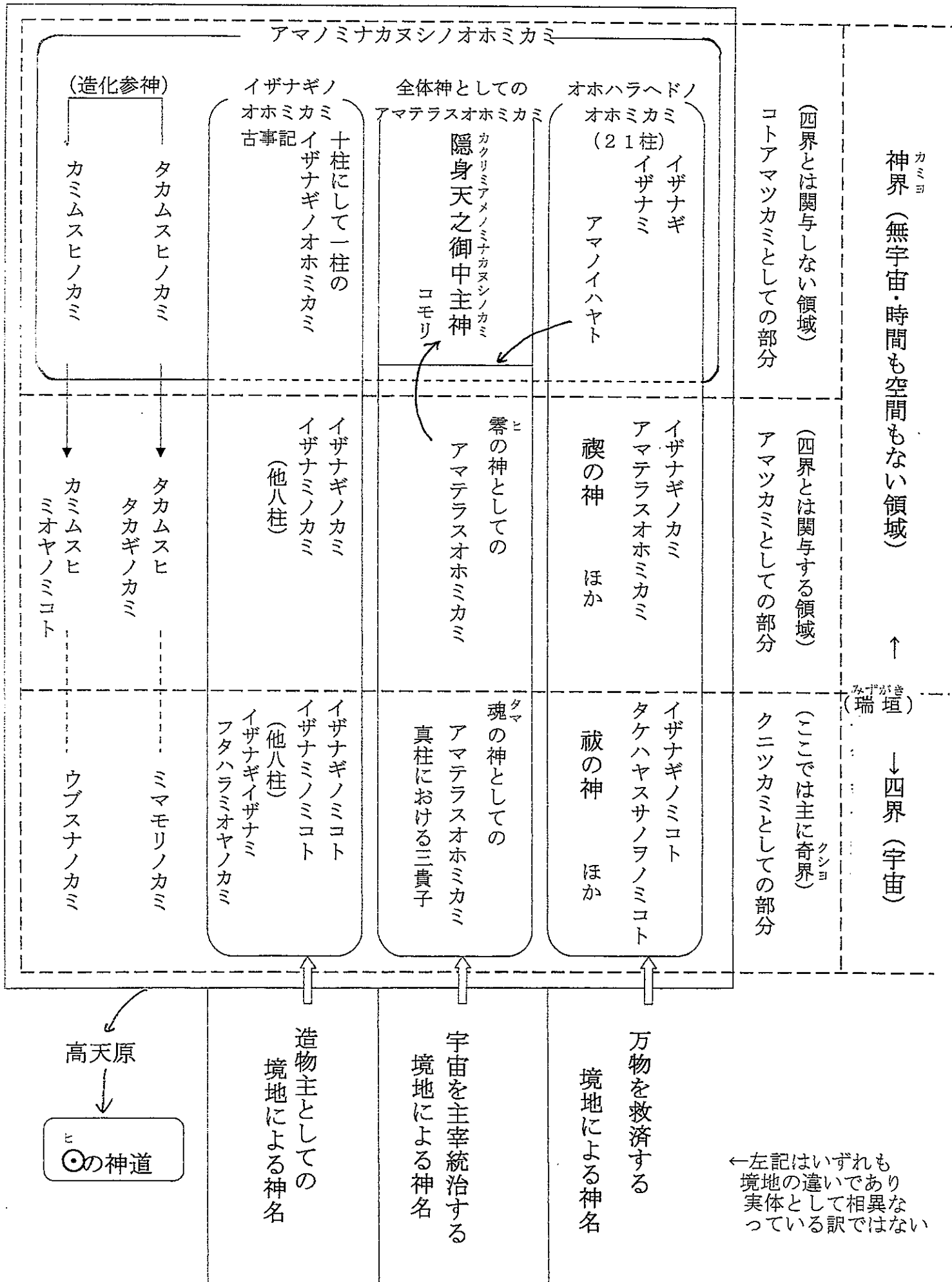
(第一版を参照)

オホミカミ（全体神）の一覧

（タカマノハラ構造）

多田流

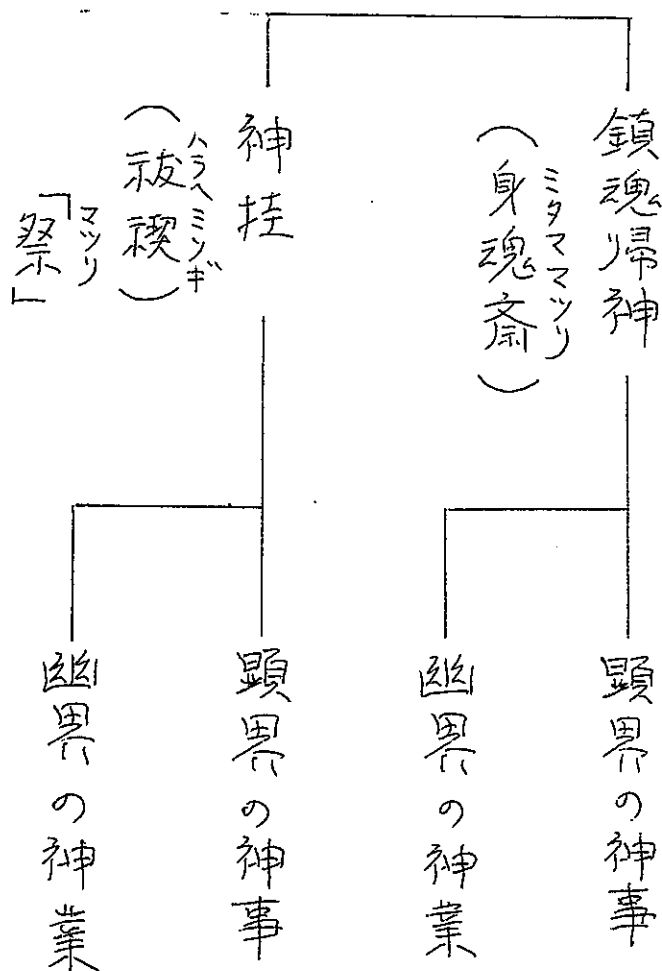
オホミカミ（一）（二）



鎮魂帰神とは

身魂齋みたままつりで、遊離ユリの諸魂を招致奉齋して高天原を築き日ひと火ひと日ひ若宮わかみやとの宇宙を産出し長養して神國たる人類世界と成さんとし成すなる禍津日まがつひ・八十禍津日やそまがつひ・大禍津日おほまがつひ・直靈なほび・大直靈おほなほびの神事であり、神挂かみかりとは現身を調伏し濟度し救出して白玉身みずかと成して自ら其の白玉身裡に白玉樓閣いはさかを築き、之れを磐境いはさかたる胎磐かがみとして鏡かがみとし鏡の船ふねとして極大極小の比ひを招祭りて直日なほひ・大直日おほなほひの人と成りて生誕するの祓禊はらへみそぎで、天照大御神あまてらすおほみたる天御鏡あまのみかがみ尊のみこと誕生の神儀尊容あれましである

日本民族の信仰 (一)



それは兎に角として、私どもが歌を詠むのは、詞として教へられた神を讚美しつつ、我もまた神の完きが如く完かんと願ふので、作歌に志すものは専念一意神の御教を仰ぎまつるべきである。

神の教へ給ふ歌ウタノコトバ 詞は幾種幾様であるか、人の身として知り得るところではない。人は唯、教へられたる範圍内で、知り得たることを褒め讃へ歌ひまつれば可いのである。

以上第一章 終

第二章 歌詞の基準

○大字大宙に標識基準を示し給ふ天之御中主神とは、換言すれば原型である。宇宙構成の基準である。之れを人間の位置から仰げば原型の原型のそのまた原型である。それは、純一不可分の靈で、極小の一で、極大の靈で、其の御活用を人間的には二柱御祖神と仰ぎ伊邪那岐命伊邪那美命二柱神と称へまつるのである。其の原型が中心たる位置に着かせたまへる時には主の神天照大御神にてましますのである。其の時の御有様を「伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生生子而。於生終得三貴子 即其御頸珠之玉緒母由良邇。取由良邇志而。賜天照大御神而 詔之。汝命者。所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂御倉板 拳之神」と古事記に載せてある。

御倉板拳之神とは伊邪那岐命の御頸珠である。それをお持ちになつて天照大御神は高天原を御統治遊ばれたのである。物に寄せまつりては御頸珠と称するので、「それを持ちて」と白しますが、その物を忘れて観れば、「於

ニアマツカミノミコトモテテ
是天神諸命以。詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神。修理国成是多陀用幣流之国。賜天沼矛而。言依賜也」と古事
記に記されたやうに、「天神諸命」であり、「天沼矛」であり、「修理固成」であり、「天命」である。之を種子
とし資料として天照大御神の高天原は築き成さるるのである。

けれども、其の「築き成さるるのだ」とは、仮に客観し得たりとしての説明であるから之もまた事実ではない。
事實は産霊産魂たる玉緒で、其の完成された箇躰は国常立尊とたたへまつるのである。

箇躰を示したる神は国常立尊と称へて、一円一音昭昭琅琅の光である。此の箇躰とは宇宙の中に在る宇宙

で、宇宙無き宇宙と等しき實在で存在であるから、零に等しくして零ではない。○だと云ふのである。此の○

とは人の眼に仰ぎ見る名称であるが、印度の古典には「其ノ御声を観て解脱るべきなり。妙音觀世音梵音海潮

音・普門示現」と伝へて○の音を教へ、猶太の古典には「詞は神なりき」と伝へ、日本の古典は「言霊の幸・

葛城一言主・天成音棚機」と教へて、白玉光底泉声潺湲の零を悟証る方便を遺されたのである。

専心一意神の言霊を称へまつれば、其処は神の国で其の人は神の人で○の天地で国常立尊の幸である。

国常立尊の幸としての人が神の教へのままに詠む歌は等しく国常立尊の幸である。之を統一魂と称へ妙

音天鼓と仰ぐ。輒、神音で言霊である。

以上 第三章 終

ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

第八章 少彦の協力

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂の神の御子に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとするれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を翻して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

靖寧和平ならしむることは、所謂「毒を以て毒を能する」のではなく、「毒を変じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変る」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまま分量と時間と空間とに適應させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用によつて醜を美に悪を善に邪を正に轉換させるので、用ゐ方とか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を称^{タタ}へ神象を画^エき神数を算^スむ」。すると、禍津^{マガツビ}昆と呼ぶところの醜惡邪曲が極底最下の火と化して根堅^{ネノカタスクニ}洲国を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に称へる秘詞とは神音であり、行事中に画^{カク}するは神象であり、斎部の算^スむは神数である。さうしてその全部が行はれれば、瀬織津比咩・速開都比咩・氣吹戸主・速佐須良比咩の神座^{カミクラ}が成立する。それは則、日若宮^{ヒノワカミヤ}で、日隅宮^{ヒスミノミヤ}で、○^{ヒカリ}である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらずるの点線面なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算^スんで「イ」となし之れを詠^{ウタ}ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出沒浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

日本民族が日本語としての神言靈カミノコトタマを忘れ佛教が傳ふところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈カミノコトタマを傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈カミノコトタマを云ふ者はあつても全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と稱するものの皆然るところで為に却つて甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

布留邊フリュウヘン由良ユラふるべゆらと古典に載せたのは斯のような禍津毘の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由良止袁布留邊の七音を加へて布留邊由良

由良止袁布留邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音カミノコトバと化るので阿三忙銀アサマギニ合ニ吽ウン吽ウン尾ビ觀キ南ナムの音は禍言であつて阿三忙銀アサマギニ合ニ吽ウン吽ウン尾ビ觀キ南ナム吽ウン但羅タラ合ニ吒タ悍カン漫マアナムの音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの祕言靈で神直靈ヒメコトタマの神言である。

布留邊由良由良止袁布留邊
ふるべゆらゆらとをふるべ。
ぬなとももゆら。

浅間山人こそ仰げ眞賢木の緑色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命イノチである天命である。之れを使用するは直日ヒトであり神直日カミノヒトであり直靈カミノカムワザであり神直靈カミノカムツナであり神日本カムヤマト磐余比古イハレヒコである。之れを阿知米阿知米アチメアチメ於於於と致へうれてある。

「^{ヒト}直日、も^{カミノヒト}神直日、も（中略）」

「アタメ、アタメ、オオオ、も、無宇宙の側の実在を指して
言う名称である。」

そして、無宇宙の側の実在は、常に

宇宙の側にある存在を「資財」として使用する立場
にある。

人間においては、^{ナホヒ}直日が使用する側であり、

^{ミタマ}身魂は使用される側の存在である。

故に「ヒト」としての主体は^{ナホヒ}「直日」であり、

それ故に、ここでは「直日」と書いて「ヒト」と読ませている。

高天原の主たる神を天照大御神と称へまつるので、人の世にては聖人であり、仰ぎ見る天界にては太陽であり、人の身には直日である。直日のみの人が在るのでもなく、聖人のみの世界が在るのでもなく、太陽の如き光のみの天界が在るのでもない。けれども、人として直日を知り、聖人を知り太陽を知るからには、直日の如く聖人の如く太陽の如く、光充ちたる身となり光充ちたる世界と成さんことを念願とし目的とすべきである。人は其の心の千態万様な如く、千態万様の物を作り事を成し得ようとも、我等は神の如く太陽の如く聖人の如く直日の如く、完全円満なる人と成り世と成さんことを目的として事を成し物を作るべきである。

之れに依つて、作歌の目的も、完全なる人となり完全なる人生を営み此の世を神の世界と成すに存することが自明瞭である。従つて其の作られたる歌詞は完全なる独立躰でなければならぬ。

完全なる独立躰を国常立尊と日本の古典には記してある。それは「天成り地定りたる時に出生れたる神聖」で、「純男である」と日本書紀に説明が加へてある。擾乱の平定された時で、風波の鎮静まつた時で、病患無き健康躰で、天之御中主神と等しき御相を顕された存在であると云ふやうな意味だから、完成された箇躰で、光である。之れを昔から各民族が○と書いて、太陽神を讃美するのに用ゐて居る。人類世界で最尊く仰がるのは太陽であるから、完全円満の御相を太陽に求めて朝に夕に信仰の誠を捧げ来つたのである。

此の光である国常立尊と此の身を作り固め此の国を築き成し其の事業を完成せよと、神代の神の教へ給ふ御詞が歌詞として人の世に伝へられた神言で、之れを「言霊」と讃へまつるのである。「しきしまの、やまとのくには、ことたまの、さちあるくに」と伝へて来たのは此の故で、詞として仰ぎまつる神が言霊なので、或学者等の如く、詞には魂が有るから言霊だとか、此の詞が微妙な活用を有するので言霊だなどと云ふ意味ではない。

クシミタマクスシキカミノカミワザトシテノヒノカミワザ
で、櫛の雄柱一つ火の火神事に神習ひ習ふのである。

人間身としては、本より極祕の零位を明にする事は不可能であるが、此の神の教へのままに之に習ひつつあれば、誰導くとはあらずとも、此の祕事を現じ得るので、齋るべき死者の境涯を明にして、之を教へ之を導き之をして高天原に入ることを得せしむるのである。

それを、詞として稱ふるのは「ミタマツリノノリト」で、古傳は頗多い。前に繰返して記した「燃ゆる火も、取りてつつみて、福路^{フクロ}には、入ると言はずや、智くともなきに」とあるも、その一つであるが、之は、本來六十二音一首の歌の前半なので、珍らしき詩形として傳へ來つた一種の長歌である。その後半は、

キタヤマニ、タナビククモノ、アヲクモノ、ホシハサカレリ。ツキモサカリテ。

とあるので、日神事を詠みたる神言^{イリト}で、神界築成の祕を教へて居る。此の神言靈を稱ふれば、之に導かれつつ神界に入るので、日本民族が「コトタマノサチ」と傳へて來たのは、此のやうな意味で、神の詞が神の國を築きつつあることを讚美したので、コトタマとは、「カミ」なる詞で、詞として拜みまつる「カミ」との義である。細しきことは別に記したる「言靈祕説」にゆづりますが、ここに一言して置きたいのは、世の人人が甚しく此の詞を誤り用ゐて居ることである。一例として高名な學者の「大祓講義」を讀みませう。

「言葉と言ふものを唯普通の言語と言ふ様な意味に使つて居りません。一つの靈として、言葉に靈魂がある

と信じて居たのであります。又必ず靈魂がある筈であります。言葉を文字に寫して、文章にして了解死んだものである。云云。結局言葉に靈魂があるといふ事であります。靈は「み」とも「ひ」とも訓みます。言葉は唯口から出るものだけではない。その無形のものの中に魂があるのであります」

ミイツ 循環図

同じ「ミツ」と、陽としては「火」と称し、陰としては「水」と称する。

無宇宙

宇宙

ノホルモを
「火」と称する。

ノガルモを
「水」と称する。

素戔
のこし

トヨノミモヒを
奉る。

この循環に上り
乗り込む作法

人間

アマノマナサの
ミモヒを汲み。

(ヨモツクニ)

(ナカツクニ)

(ヨモツクニ)

(幸.136)

ミンスビノカミ

無宇宙

ミヅ、経テとしては綾威
緯ヨとしては水

次に三産霊神

ミヅが
移項

(地)

ノ
ボル
モ
ノウ
ダ
ル
モ
ノ

(水)

(地^へのミヅ)
から(天^へのミヅ)
からあくまで
旧約聖書の用語

宇宙

ミヅ は コトマ であり 霊的な実体の名称だが、

ここで言う「火」や「水」はただの呼称名である。

ノボルモノ 「本質的に昇り続けるモノ」という意味ではなく、

循環するミヅの^上昇局面を指して、

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ 上記と同様。

(カッコ内の数字は、すべて言霊の章の頁数)

無	(極) サギリとも 言う。(149)			と 解けたる○のこと 説明的には「アマ」と 言う。(136)	ア マ
(ヒ)	結果として の「サギリ」	「イブキ」 の「修理」 (イザナミ)	「ヒ」 の「固成」 (イザナギ)	「カミ」 の「ミイヅ」 に由来する	は 本 来
宇				治用	大 宇 宙
(ビ)	ヒの作用力 (名称は多数ある が、実体としては ただ一種類、	ア マ ツ イ ブ キ	ミ ヅ (本体としての「アマ」に対する ミイヅ イキ イブキ 他、イナチ、タマノヲ、ミヅホ、 (89)	(136) 活用)	の 内 容 と 外 観
(マ)		吸 う	吐 く	活用の結果 マ	を
宙				結びたる○ 人の身として仰げば すべてのものの標識基準 であり、これがさらに 結ばれて万有となる。 (136)	一 語 に 包 括 し た
↑					詞
↓					ト
宇		笛体		万類万物 (左記の「笛体」と同義)	(128)
宙	「わが息」は、あくまでも アマツイブキの象徴である。				

教愛寮に

於ける講話

多田山雄二

一、天帝と人

天神地祇と称する天神の文字を借りて日本の古典は天津神の義に充当て用ゐたれども、天津神とは極大極小の比が築き成したる最大最小の點なる莫量圓隣にして直日・大直日・三十六神

界なれば支那人用ゐるところの天神の義にはあらざるなり。

数学家は云はく、最大最小の数と。科学者は云はく、陰極は陽極なりと。見よ。極大極小の比を。又思へ。最大最小の天を。隔つること無く限ること無くして宇宙を構成せるは最大最小の天なり、日本民族伝承するところの天津神にして又国津神なり。

宇宙ならざるの宇宙は極大極小の一にして一切なれば、日本民族は天祖と伝へ天命と教へ命と称し血統と呼びて稜威なる道なり。上下高卑はおろか遠近親疎を立つることなく時間を撤し空間を捨てて一圓昭昭たり一音琅琅たり。

日本ノ古典ニハ此ノ国ヲ莫囿圖隣下記載シテあめト傳

ヘタリ。さやぎなきくにトノ義ナレバ囿キフト莫ギ一圓光

經ニ築キ成レ先^{アツクニ}國ナリ天國魂ナリトノ義ニシテ如浮脂而

久羅下那洲多陀用帶琉^{クニ}ト云ヘルハ囿^{アツクニ}ナリ。其ノ莫

囿^{アツクニ}ナルハ修理國成是多陀用帶琉之國^{クニ}ノ意ニシテ

「圓」トハ一圓相ナリ一圓光ナリトノ義ナレバ久羅下那

洲多陀用帶琉國^{クニ}ニ修理國成先曉ハ圓光日之耀タル

鏡面ノ如クナリ「白^{ハカ}熱^{ガミ}」^{カガミ}「羅摩^{カガミ}」等ト借字シタカガ

みナルナリ。大圓鏡ト佛教ニ云フトフロノ虚空藏ナリ空

ナリ無ナリ人間身ニハ見聞覺知元コト能ハサル窮極

ナリ窮極トモ知ラレサル極ナリ宇宙無ギナリ。此ノ宇宙

無ギ大圓鏡・虚空藏・かがみ・一圓光・一圓相・莫

囿圖が宇宙ヲ築成シ先時ヲ大圓鏡智・虚空藏甚

経緯無クシテ経緯ヲ現ズルハ現象世界ノ主體ニシテ
 現象世界ノ中心ニシテ現象世界モシテ現象世界タル人
 間身心ノ知り得タル窮極ナリ。窮極ナルが故ニ
 シテ一切ニシテ最小ニシテ最大ニシテ箇體タル宇宙トシテ
 ノ在ル限リナリ。

在ル限リナレバ窮數ニシテ滿數ニシテ最小ノ數ニシテ最大
 ノ數ニシテ最大最小ノ數ニシテ経緯ヲ認識シタル限リ無
 キ世界ナリ。故ニ有限ノ無限ナリ。

有ク現ク現象世界ヲ一貫シテ不變易ナリトノ義ナリ。
 開華落葉モ榮枯盛衰モ生死遷流モ起伏成壞モ
 無キノ國ナリ。

之レヲ莫大靈圖隣ニ
 稱ヘテ大日本帝國ナル
 高天原ノ神國ナリトス。



十四字秘言と大宇宙概念図

ヒノカミ はたふま

